サラリーマン　市民の視点で

動物医走る　第340話　③

「野生」治療の難しさ

森田さんはベテランの獣医だが、当初、けがや衰弱で自宅に運び込まれる野生動物たちは、生まれて初めて接するものばかりだった。

森田さんの学んだ酪農学園大学もそうだが、日本の大学が獣医教育の中で、野生動物を扱うことはほとんどない。

保護した動物は次々と死んでいくし、頼りとなるテキストや文献はない。動物園や博物館関係者のアドバイスを受けながら、手探り状態での「開業」となった。

キタキツネやタヌキは犬を参考に、シカは牛や羊の例を応用して取り組んだ。学生時代に戻ったように勉強した。鳥の治療に役立てば、と「ドロ縄」式に野鳥の会に入ったのもこのころだった。

保護された野生のエゾシカ

野生動物には銅い主がいない。当然、治療費を払う人もなく、自腹を切ることになる。それでも、「やられっぱなしの動物たちを黙って見ているのもシャクだから」と、あきらめなかった。

治療そのものは何とかこなしたが、その後が大変だ。衰弱だけなら、体力さえ戻れば野生に返せる。しかし、羽や足にけがをした鳥や獣には一定期間、リハビリを施さなくてはならない。

ところが、十分な設備がない。タヌキのような動物なら大型のケージの中でも可能だが、ワシの飛行訓練には、小学校の体育館くらいの施設が必要なのだ。

リハビリがうまくいかなければ、野生に返してもすぐに死んでしまうだろう。治療後の数日間が勝負。ダメなら死ぬか、それとも、一生〝いそうろう〟となるか……。

みんな生まれ故郷に帰してあげたい。保護中の動物たちに名前を付けないのも、こうした森田さんの気持ちの表れだ。

シカは「シカちゃん」、フクロウは「フクちゃん」とだけ呼ぶ。傷付いた動物たちは大自然の「住人」であり、ペットではない。

しかし、現実は厳しい。森田さん宅には現在、野生のエゾシカが五頭いるが、うち三頭は手術で切断したため、足が三本しかない。

また、数カ月に及ぶ長いリハビリ期間中には、えづけが不可欠となる。しかし、人の手からえさをもらうことに慣れた動物は、野生に戻れないというジレンマもある。

「ハナ」という名前の付いたシカがいるが、これはこのシカがもう故郷には帰れないことを意味している。

ハナは小さい時、衰弱して動けなくなっているところを保護された。ミルクで育ったシカはもう野生のシカではないのだ。

サラリーマン　市民の視点で

動物医走る　第340話　④

〝患者〟への愛を歌に

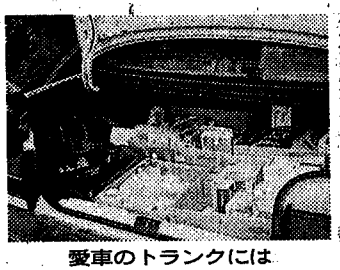
森田さんが作詞・作曲した「獣医の歌」の一節だ。

「俺は田舎の獣医／すてきな娘にゃもてないけれど／めんこいベコ（牛の愛称）が待っている／はしれポンコツ薬をのせて／吹雪の広野を西東」

森田さんにとって、傷付いた野生動物の治療や保護は純粋なボランティア。本業は、農業共済組合の獣医で、家畜診療センターに勤務している。

勤務時間が決まっているサラリーマン獣医の方が開業医より、逆に自由に動けると思っている。

家畜センターの獣医は、体力が勝負。



愛車のトランクには医薬品がギッシリ

朝に夜に、広い原野に点在する農家を車で駆け回り、往診する。

〝患者〟は体の大きい牛たち。治療はまさに力仕事だ。特に難産の処置には、苦労と悲しい思い出が多い。

獣医になって間もないころ――。ある冬の夜、連絡を受けて農家に急行してみると、産気づいた母牛がへたりこんで苦しんでいた。子宮がねじれ、子牛が出られないのだ。

子牛を固定し、母牛の足をロープでくくってねじれと逆方向に転がす。中標津の冬の夜は零下三十度にもなるが、血やふんにまみれるので森田さんは素っ裸。吹きつける風は、まさに身を切るようだ。

暖をとるため、当時は飲めなかった酒を「ぐいっ」とあおった。そして、東の空が白らみ始めるまで、一晩中、牛を転がし続けた。

子牛は助からなかったが、母牛は命をとりとめた。

車での帰宅途中、安堵（と）と疲労感から強烈な睡魔に襲われた。暖房のぬくもりが心地良く、まぶたを開けていられない。

はっと、我に返った。目の前にあるはずの道がない。反射的にブレーキを踏み込んだ。すんでのところで車は止まった。すぐ前に、黒々と水をたたえた池が広がっていた。

森田さんは仲間たちとフォークグループ「ザ・獣医ズ」を結成した。町の文化祭や牧草畑でコンサートを開き、農家や炭坑労働者への共感を歌ってきた。

アマチュアのフォークコンテストにも出場した。「離農の歌」をひっさげ、地区予選を突破。

道内の決勝大会へ進んだが、惜しくも涙を飲んだ。この時、優勝したのが中島みゆき。森田さんの〝永遠のライバル〟だ。

森田さんは昨年暮れと今年初め、札幌と釧路で「歌手生活二十周年記念コンサート」を開いた。そこで、三本足となったシカへの愛情を込め、「走れシカちゃん」を熱唱した。